

芥川龍之介「母」試論

—近代中国の都市表象を視座として—

姚 紅

一 はじめに

「母」は1921年9月号『中央公論』で発表された短編小説であり、後に作品集『春服』（春陽堂、1923年）に収録された。作品の要約は以下の通りである。主人公の野村敏子は夫の仕事で上海の旅館にいた。彼女は、上海に着いてもまもなく肺炎で愛児をなくしていた。愛児の死を忘れるために、夫と三階から二階の部屋に引っ越してきた。だが、隣室の子供の泣き声に耐えられないため、夫と再び三階に戻った。翌日、敏子は二階の子供の母親である女と知り合い、そこで子供に関して言葉を交わした。その母親は、敏子の境遇に同情しながらも、母であることを得意がる。その後、敏子と夫は蕪湖の社宅の雍家花園へ移住した。ある日、上海から手紙が届き、隣人の子供も肺炎で死んでしまったことを知った。敏子はそれを夫に伝えながら、あの子供がなくなったのがうれしいと言う。夫はそれを聞いて、「何か人力に及ばないものが、厳然と前へでも塞がった」（第八巻、83～84頁）¹ように感じた。

この作品は、発表された直後に厳しい非難を浴びた。例えば、葛西善蔵は『時事新報』で「十五頁ばかりの短編としては描写と云ひ工夫と云ひ申し分がないと云ふ気がするが、さてどうと感想を叩かれては、何と云つていゝか、底の手ごたへの感じが微弱だ。額縁に収まつた水彩画の感じだ」²と評した。また、伊藤貴麿は、「『母』にしても、氏が丹念に描写する程の場面でもなし、真剣に取扱ふだけのテーマでもない」と云ふやうな気がする³と批判した。

一方、葛西善蔵や伊藤貴麿の酷評と異なって、田山花袋は1921年12月4日の『山陽新報』で「私の眼に映つる現代作家の作品 無駄な努力が多い」という文を通して、「母」を次のように高く評価している。

可成非難は多かつたやうであるが「母」と云ふ小説などは、勝れたものだと思つて読んだ。決してあの文壇的の非難は当つて居ない。耳からの感じさうしてその描写、眼からの感じ、さうしてその描写などは、実に現代小説壇に重きをなすものだらうと思ふ。

いかに非難があらうとも、私には芥川君の「母」は菊池君の「ある物」或は「俊寛」などよりはずつと、典型的なものだといふことが出来る。

けれども、私はあゝした境地へ入るといふことを、恐ろしいことだと思う。芥川君の持つてゐる自然主義は、徹底的なものだ。いひかへれば、徹底的自然主義である。さうしてあの耳からの、眼からの、非常に聡明な感じは、逆でも他の追従を許さぬものがある。

花袋はこの文章で、当時の文壇で好評を博した菊池寛の「ある物」や「俊寛」より、非難された芥川の「母」を「典型的なもの」と高く評価している。「母」における「耳からの感じ」や「眼からの感じ」の描写に感心した故に、日本自然主義の創始者・中心人物である花袋は、その描写を「現代小説壇に重きをなすもの」と称賛し、作者の芥川を「徹底的自然主義」者と評価している。

「母」に関しては、従来の研究が少なく、芥川の同時期の〈母〉をモチーフとした「黒衣聖母」、「女」、「捨児」、「おぎん」、「お律と子等と」、「少年」などの作品と合わせて論じられてきた。例えば、「死んだわが子を悼む母の悲しみは、おなじ不幸に遭遇した母親の手紙の前で、〈烈しい幸福の微笑〉を浮べることのできる悪魔を隠していた。(中略)〈母〉は〈悪〉と隣りあわせに、〈女〉の心性のうちに住んでいた」⁴という三好行雄の指摘や、「地上的秩序に貫かれて、時には悪や罪をも辞さない女人が描かれる」⁵という奥野政元の論点や、「短編「母」においては狂気がただ狂気として書かれるのではなく、全体として穏やかな静寂のトーンの裡に描きだされて、母親の狂気が語り始められた」⁶という萩原千恵の見解のように、母になったが故の女性の「悪」、「狂気」、「病」的な側面をもつ作品として、この小説は評価されている。ところが、これらの先行研究では、作品の舞台背景が考慮されていないのである。

芥川は1921年3月30日に上海に到着し、5月17日に鳳陽丸で上海から蕪湖へ出発した。「母」は彼が実際に訪れた上海と蕪湖を舞台とし、帰国直後に最初に発表した中国関連の小説である。だが、同時代の中国の社会状況と合わせてこの小説を論じた先行研究は決して多くない。戸田民子は、上海の里見医院における芥川の入院体験と交友関係を詳しく検討したが、「母」の舞台設定について「中国より帰国直後の作品であった故、半ば思いつきに上海を登場させたにすぎず、それ自体に然したる意味はない」⁷と説明している。しかし、「母」は近代中国の都市における日本人について描いた作品であるが故に、その作品世界を読み解く際に舞台としての上海は決して無意味のものではない。

他方、鈴木暁世は小説の舞台の上海や蕪湖に注目し、「日本人旅館や社宅という

空間は、外地であるが故に逆に内地を志向し、閉鎖的・均一的な空間を形成してしまう」と指摘し、敏子を「母からの脱落者として同質的・閉鎖的な空間で抑圧されている」女性として捉えている⁸。鈴木 of 指摘は非常に示唆に富んでいるものであるが、小説で描かれた近代中国の都市における日本人社会についての考察や分析は決して十分とはいえない。つまり、上海や蕪湖といった近代中国の都市のコンテキストから「母」を再考する余地が残されていると思われる。

したがって本論文は、「母」で描かれた上海や蕪湖の都市空間に焦点を当て、作品の背景である近代中国の歴史的・社会的状況を踏まえつつ、以下のような問題を考察していきたい。それは、中国旅行の経験がどのような形で作品に活かされているのか、上海と蕪湖がどのように構築され、どのような意味が付与されているのか、といった問題である。

二 「病」の空間としての上海

芥川は、1921年3月から7月までに、上海、南京、長沙、北京、天津など近代中国の主要都市で遊歴した。諸都市の中で、芥川が最も気に入ったのは古都の北京である。北京見物の当時に芥川の案内役をしたのが、中野江漢⁹であった。中野は、その経緯に以下のように触れている。

この十刹海の掛茶屋で三度も芥川君と対談した中に、話の種が尽きたのか、どうしたきつかけだつたかお互に身の上話にまで及んだ。それから半年も経つてから後、芥川君から稀らしく手紙が来た。それによると、「中央公論」の秋季特輯に「君等夫婦が大連で子供を亡くした時の話を主材として小説を書いて置き、場所だけ南に変へて置いた」と、掲載の「中央公論」まで添てある。見ると「母」と云ふ短編輯、私等が当時感情と多少相違の点はあるが、兎に角私等夫婦が小説中に躍如として居る。この小説「母」は、その後芥川君の短編中「春服」の中に納めてある。その後東京で文士連と会食した時に芥川君が誰かに「母の主人公を紹介する」といつたことがある。仲間には相当話題に上つたものと思はれる。¹⁰

中野は、1918年に富山県出身で東京の中村高等女学校卒の上田つじと結婚した。そして、異郷の地であった大連で最初の子供を失った。この中野夫婦の経験は、北京滞在の芥川に強い印象を残した。それ故に、帰国後に芥川は中野夫婦を「母」のモデルにし、小説を創作したわけである。ここで問題になるのは、何故芥川が、

「母」の主人公の夫婦が子供を失った舞台を上海に設定したのかということである。

周知のように、国際的大都会の上海は芥川が訪れた最初の異国の大都市であるが、最も嫌悪感を抱いた都市でもある。その理由の一つは、上海に上陸した後の病氣再発と入院体験である。以下において、同時代の言説を踏まえながら、「母」という小説で如何に上海が「病」の空間として表象されているのかを検討する。

芥川は1921年3月30日に上海に上陸したが、発熱で4月1日に日本人経営の里見医院に入院し、三週間にわたり治療を受けた。神経質な彼が不案内な土地での入院により不安の念に駆けられたことは想像するに容易であろう。実際、4月24日に宿泊の万歳館より養父に送った書簡で、彼は「一時は上海にて死ぬ事かと大に心細く相成候」（第十九巻、164頁）と書いた。さらに、帰国後に発表された「上海游记」の「五 病院」においても、以下のように病氣に対する不安や恐怖を述べている。

それでも七度五分程の熱が、容易にとれないとなつて見ると、不安は依然として不安だつた。どうかすると真つ昼間でも、ちつと横になつてはゐられない程、急に死ぬ事が怖くなりなぞした。（第八巻、17頁）

家族に送った書簡や「上海游记」の記述を通して、芥川は異郷の上海での発病や入院によって「死」の恐怖を感じたことを強調している。従来の研究でも、芥川の入院経験が「母」に影響を与えたと指摘されている。だが、死ぬかと思うほどの不安や恐怖を抱いた芥川の経験がどのように「母」に活かされているのかについては、殆ど論じられていない。以下は、「母」で描かれている「病」と「死」について検討してみたい。

「母」においては、初めて「病」と「死」に言及されているのが第二章である。それは、以下のような二階の部屋で泣いた子供の母親である女性と旅館の女中の間で行った会話である。

女は何か考へるやうに、丸丸した顔を傾けて見せた。

「あの方でせう？ 此処へ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ。御気の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになつたんですけれど。」

「ぢや病院で御なくなりなすつたの？ 道理で何にも知らなかつた。」（第八巻、73頁）

「母」の第一章において、主人公の敏子は隣室から子供の泣き声が聞こえ、夫に三階の部屋に戻ることを強要したが、その理由を説明しなかった。第二章において、主人公の敏子が上海到着早々愛児を失ったことは、子供の母親である女性と女中の会話を通して初めて明かされている。また、「ぢや病院で御なくなりなすつたの？道理で何にも知らなかつた」という子供の母親の話でもわかるように、敏子の愛児が死亡した場所が上海の病院であったことは、意外な出来事として強調されている。

ここで、同時代の上海における医療に関する状況を見てみたい。欧米の宣教師や教会による医療施設は19世紀中頃より中国全土に広がり、20世紀の初頭には設備の整った近代的病院や医学校が主要都市で相次いで設立されていた。1842年の南京条約により開港された上海は、医療宣教師による病院や診療所の設立を通して急速に近代医学がもたらされ、欧米系の病院が集中する都市となった。

一方、明治維新後、西洋医学が政府によって奨励され、日本の医学の主体となっていた。それと同時に、海外の日本人居留民の衛生施設と医療条件も国内のものと同じように重要視するようになってきた。1876年11月に上海に滞在したわずか100人余りの日本人居留民の医療問題を解決するために、日本総領事と現地の日本人有力者と相談し、日本政府に対して日本人医師を派遣することを請願した。翌年7月に、上海で最初の日本人医師が政府から派遣され、東本願寺上海別院に診療所を開設し、日本人居留民に診察代を免除して薬代だけ徴収し、貧しい人は領事館の証明によってすべて無料で診察を受けることができた。

それ以降、日本人医師は相次いで上海に渡り、診療所や医院を開設した。1920年代半ばには、上海の日本人居留民は2万人近くになり、日本人医師と日本の病院は急増した。平野健著『上海渡航之葉』（上海、1921年）の記載によると、1920年12月に上海日本医師会員となった日本人が34人おり¹¹、その中で西洋医学を主とし、しかも専門家としての学歴や資格を備えた名医たちも少なくなかった。そして、上海の日本の病院の大半は、個人経営の中小病院であった。

多くの日本の病院の中で、芥川が入院した里見医院は、宿泊先の万歳館のすぐ近く、密勒路A6号（現上海市虹口区峨嵋路108号）にあった。院長の里見義彦は、1902年に長崎医学専門学校を卒業し、1906年に上海に渡り、内科を主とした医院を開業した。芥川は、帰国後に発表された「上海游記」の「五 病院」において、病状や入院中関係者との交際を語っており、里見院長について「唯書き加へて置きたいのは、里見さんが新傾向の俳人だった事である」（第八巻、18頁）と紹介している。だが、「上海游記」には里見医院に対する直接的な記述が見当たらない。また、現存の芥川書簡にも里見医院の名に言及しているものの、それに関する記述が極め

て少ない。

「母」において、敏子は翌日に二階の廊下で隣室の女性に出会い、愛児の病死をめぐって以下のような会話をした。

「御宅ではとんだ事でございましたつてねえ。」

敏子は沾んだ眼の中に、無理な微笑を漂はせた。

「ええ、肺炎になりましたものですから、——ほんたうに夢のやうでございました。」

(中略)

二人の母は佇んだ儘、寂しさうに朝日の光を眺めた。

「こちらは悪い風が流行りますの。」

女は考へ深さうに、途切れてゐた話を続けた。

「内地はよろしうございますわね。気候もこちら程不順ではなし、——」

「参りたてでよくはわかりませんが、大へん雨の多い所でございますね。」(第八巻、76頁)

この会話から、敏子の愛児が肺炎で死んでいたことが明かされた。ここで注目すべきなのは、二人の母親が上海の気候に対して抱いた不満である。気候のよい「内地」と対照的になり、上海は「悪い風が流行り」、「大へん雨の多い所」と見做されている。

上海の気候と病との関連については、同時代上海に関する旅行案内書などにしばしば取り上げられている。例えば、内山清・山田修作・林太三郎著の『大上海』(1915)において、以下のように述べられている。

伝染病症が当地の風土病と見做るゝに至りたるは外に検査機関薄弱にして病毒の輸入を防止すること微力なると内に菌類の撲滅を厲行せず各菌が各所に潜伏するが為めなり結核及トラホーム等の伝染病の殊に多きを見るは住居密集して且つ不潔なるに依らずんばあらず上海には以上の如き恐るべき各種伝染病の黴菌が伏在し時を俟つて毒牙を逞ふせんとしつゝあり蓋し東洋に於ける悪疫源泉地と目せらるゝも亦所以なきにあらず

(中略)

上海に於て一万の在留邦人は如何なる病魔に襲はれて苦みつゝあるか又悪性なる病魔に魅せられて終に生命をも奪はれ雲外不歸の客となるもの¹²

『大上海』は、上海へ視察・滞在に訪れる日本人に対して上海の概要を簡明に紹介するガイドブックである。著者の三人も中国研究に秀でた者であった。内山清は、外務書記官として上海総領事館で貿易調査報告の任にあった。山田修作は、東亜同文書院を卒業した後に農商務省から貿易調査報告のため派遣されていた。林太郎は、十数年間中国で実業に係わり研究を進めていた。さらに、52名にも及ぶ上海在留日本人有力者の協力を得て、行政資料がふんだんに掲載されている。このように、この本は同時代の他のガイドブックより正確性を認められ、これまでにない内容の充実を達成した初めての本格的上海ガイドとされている。

『大上海』の記述を通して、当時の上海は「各種伝染病の微菌が伏在」し、「東洋に於ける悪疫源泉地」と見做され、日本人の命を奪う悪の都市として表象されている。一方、「母」において、二人の日本人女性の上海の気候に関する会話は、『大上海』のような誇張的な表現より極めて淡白なものであるが、気候不順な上海が子供の病死の発端となるという共通認識を示している。

また、「母」の第三章においても、上海の病院での「病」と「死」は再び言及されている。夫と蕪湖へ赴任し、社宅の雍家花園で田舎の暮らしを始めた敏子は、ある日の午後、届いてきた手紙によって、隣室の女性の子供も上海の病院で死亡したことを知った。以下の引用は、敏子が夫にその手紙の内容を伝えた場面である。

「あら、お隣の赤さんも死んだんですつて。」

「お隣？……」

男はちよいと聞き耳を立てた。

「お隣とは何処だい？」

「お隣よ。ほら、あの上海の××館の、——」

「ああ、あの子供か？ そりや気の毒だな。」

「あんなに丈夫さうな赤さんがねえ。……………」

「何だい、病気は？」

「やつぱり風邪ですつて。始は寝冷え位の事と思ひ居り候ところ、——ですつて。」

敏子はやや興奮したやうに、口早に手紙を読み続けた。

「病院に入れ候時には、もはや手遅れと相成り、——ね、よく似てゐるでせう？ 注射を致すやら、酸素吸入を致すやら、いろいろ手を尽し候へども、——それから何と読むのかしら？ 泣き声だわ。泣き声も次第に細るばかり、その夜の十一時五分ほど前には、遂に息を引き取り候。その時の私の悲しさ、重々御察し下され度、……………」

「気の毒だな。」

男はもう一度ハムモツクに、ゆらりと仰向けになりながら、同じ言葉を繰返した。男の頭の何処かには、未だ瀕死の赤児が一人、小さい喘ぎを続けてゐる。と思ふとその喘ぎは、何時か又啼き声に変わってしまう。雨の音の間を縫った、健康な赤児の啼き声に。——男はそう云ふ幻の中にも、妻の読む手紙に聴き入つてゐた。(第八巻、79～80頁)

上の引用においては、「注射」や「酸素吸入」といった西洋医学の用語が注目に値する。前述したように、当時の中国の諸都市の中で、上海には西洋の医学知識の豊富な医師や設備完全の医療施設が完備しており、近代的な医療事業が盛んであった。だが、1921年に外務省通商局が編集した『在上海帝国総領事館管内状況』の中には、以下のような記述がある。

医師及病院 支那ノ医業ハ兎角進歩セス内地ニアリテハ宣教師ニシテ医師ノ心得アルモノ西洋医術ヲ施ス外甚タ不完全ナル漢法医アルノミサレハ偶々病人アルモ多クハ医師ニヨラス売薬ニテ自療スルニ過キス斯カル有様ナルヲ以テ医業ハ支那ニ於テ最モ缺乏セリト雖モ支那人中西洋医法ヲ信スルモノ未タ多カラス故ニ開港場ニ居住スルモノニシテ曾テ洋医ノ医療ヲ受ケタルコトアルモノ或ハ之ヲ聞伝ヘタルモノノ外未タ一般ニ伝ハルニ至ラスサレハ本邦医師ノ渡航シテ本邦ノ進歩セル医術ヲ施スノ余地大ニ存セリト雖モ当初信用ヲ得ルマテノ間多少ノ困難ヲ忍ハサルヲ得サルヘシ¹³

上述の記述の中で、上海の「不完全」で後進的な病院設備や医学技術が特筆され、医療の面で先進的な日本による開拓の「余地」が大きいと強調されている。このような上海の病院では「注射」や「酸素吸入」など西洋の近代医学の治療手段を用いても、その「丈夫」で「健康」であった幼い子供の命を取り留めることができなかったのである。つまり、近代的な医療事業が展開されていた上海は、依然とし日本人旅客の命に危険をもたらす都市として描かれているのである。

三 「上海特有の旅館」の特殊性

「母」において、第一章と第二章の舞台が上海であるが、注意しなければならないのは、小説の展開が「上海特有の旅館」の内部を中心に繰り広げられている点である。つまり、この旅館の内部空間が作品構成に大きく機能していることは看過で

きない。したがって、本節では「母」に描かれている「上海特有の旅館」という特殊な内部空間を考察していきたい。

小説の冒頭で、「上海特有の旅館」の特殊な異国の空間が描き出されている。

部屋の隅に据えた姿見には、西洋風に壁を塗つた、しかも日本風の畳がある、上海特有の旅館の二階が、一部分はつきり映つている。まずつきあたりに空色の壁、それから真新しい何畳かの畳、最後にこちらへ後を見せた、西洋髪の方が一人、——それが皆冷やかな光の中に、切ないほどはつきり映つている。（第八巻、66頁）

「西洋風」に塗った壁、「日本風の畳」といった描写は、見事に「上海特有の旅館」の特質を浮き彫りにし、異文化の融合した国際的都市としての上海の一側面が現れている。

ここで、上海における日本人向けの旅館に関する歴史的背景を確認しておこう。1875年に三菱商会は内務省の命令に応じ、横浜—上海間に週一回の定期航路を開設した。これが日本人自らの手による最初の海外定期航路である。開設後、上海在留の日本人が次第に増加し、旅館および下宿屋は次々に多数の日本人の居住した虹口地区を中心に開業されてきた。日本式旅館の多くは、国際的大都会の上海の雰囲気と合わせ、外観が鉄筋コンクリートであったが、その内装は基本的に日本式となっていた。芥川が旅行した当時の上海には日本人経営の旅館が9館あり、「邦人の趣味に適合するよう改築したので」「内地一流の旅館に比して遜色なき」¹⁴ものであった。

当初、芥川が上海で投宿を予定していたのは、東和洋行という旅館であった（図1）。東和洋行は1886年に鉄馬路（今の河南北路）と北蘇州路で開業した。創業者は吉島徳三であったが、その後経営者と場所を再三変えた。当時、日本人は上海で旅館を経営する際に、日本領事館が1883年に発布した「上海居留日本人管理規則」に従い、許可証を取るのが必須となった。そして東和洋行は、日本領事館の規定によって上等旅館に分類された。その後、1894年に朝鮮の開化派の政治家である金玉均（1851～1894）がこの旅館で暗殺されたことを大いに宣伝し、上海の日本人



図1：東和洋行の広告。江南健児『新上海：附・蘇州杭州南京案内』、日本堂書店、1923年。

社会でも知名度が高まり、「上海に於ける邦人発達史と深き縁を有し」¹⁵た旅館とされていた。

しかし、東和洋行に対して、芥川はその内部の空間を「上海游记」で次のように記している。

やがて馬車が止まつたのは、昔金玉均が暗殺された、東亜洋行と云ふホテルの前である。(中略)

我我はすぐに薄暗い、その癖装飾はけばけばしい、妙な応接室へ案内された。成程これぢや金玉均でなくても、いつ何時どんな窓の外から、ピストルの丸位は食はされるかも知れない。(中略)それからその部屋へ行つて見ると、ベッドだけは何故か二つもあるが、壁が煤けてゐて、窓掛が古びてゐて、椅子さへ満足なのは一つもなく、——要するに金玉均の幽霊でなければ、安住出来る様な明き間ぢやない。(第八巻、10～11頁)

旅館の名前を「東亜洋行」としたのは芥川の誤記であるが、上述のようなユーモラスな描写を通して、慣れない異国にいた芥川の不安や、ホテルの館内装飾に対する不満を窺うことができる。

結局、芥川は、その日の夜に東和洋行に近い万歳館(図2)に移った。万歳館は1904年に相川清九郎が創業した旅館であり、1912年に西華徳路45号の赤煉瓦造り三階建ての旧アメリカクラブに移転した。芥川が宿泊した当時、「陸軍中支派遣隊・海員協会・大阪貿易同志会指定御宿」という看板を掲げていた。建物は多くの人の目を奪うほど西洋風であるが、その内装は完全に日本式であった。由緒ある旅館として当時の日本人旅客の間でかなり評判が高く、繁盛していた。

しかしながら、上海旅行の体験を書いた「上海游记」においては、東和洋行に関して前述した詳細な記述があるものの、万歳館に関する直接的な記述は殆ど残されていない。芥川は万歳館に投宿した翌日から再び発熱し、4月1日に乾性肋膜炎で里見医院に入院せざるをえなかった。三週間後に退院した当日から上海見物を再開し、多忙な毎日を送っていた。つまり、回復して以来ほぼ毎日外出し、旅館に滞在する時間が少なかっ

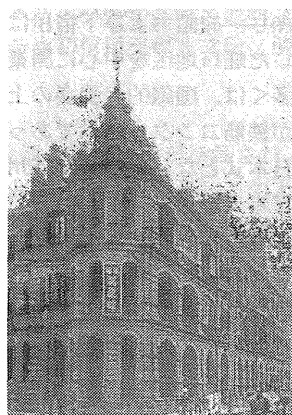


図2：西華徳路の日本人旅館・万歳館。陳祖恩著、大里浩秋監訳『上海に生きた日本人——幕末から敗戦まで』、大修館、2010年、114頁。

たため、万歳館に関する記述が少なかったわけである。

ここで、「母」の第三章に戻るが、隣室の女性から手紙が届いてきた際に、敏子は「お隣よ。ほら、あの上海の××館の」（第八巻、80頁）と夫に説明していることに注目したい。この箇所描写から、「母」における「上海特有の旅館」は名前が明示されないが、芥川が上海滞在中に宿泊した万歳館をモデルにしていることがわかる。

敏子夫婦は上海に到着した当初、三階の部屋に住んでいた。その三階の部屋について、小説の第一章で敏子の夫の回想によって、以下のように描かれている。

男は彼は二週間ばかり、彼等が窮屈な思いをして来た、日当りの悪い三階の部屋が一瞬間眼の前に見えるような気がした。——塗りの剥げた窓側の壁には、色の変った畳の上に更紗の窓掛けが垂れ下つている。その窓には何時水をやつたか、花の乏しい天竺葵が、薄い埃をかぶっている。（第八巻、67～68頁）

芥川は「日当たりの悪い」、「塗りの剥げた窓側の壁」、「色の変った畳」、「薄い埃をかぶっている」「花の乏しい天竺葵」といった部屋の細部を描写し、周到な視覚的イメージを通して旅館の「窮屈な」側面を強調している。ここでは、第一章で描かれた「西洋風」に塗った「空色の壁」、「真新しい何畳かの畳」の二階の部屋とコントラストをなしているが、旅館全体の陰鬱な空間が強調されている。また、第一章における「隣室の赤児の啼き声のほかに、何一つ沈黙を破るものはない」、「未に降り止まない雨の音さえ、ここでは一層その沈黙に、単調な気もちを添える」といった描写から窺えるように、「上海特有の旅館」の部屋は寂寥感や疎外感を喚起させる空間となっており、前述した東和洋行の部屋のイメージと重なっている。このように、投宿しなかった東和洋行の部屋に対する芥川の不快な印象も、この小説の舞台背景に投影しているといえよう。

「母」の第一章は始めから終わりまで旅館の部屋の内部に焦点が当てられているが、第二章で旅館の光景は、以下のような二箇所描かれている。

（1） 午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。商売に来たのも、見物に来たのも、泊り客は大抵外出してしまふ。下宿してゐる勤め人たちも、勿論午後までは帰つて来ない。その跡には唯長い廊下に、時時上草履を響かせる、女中の足音だけが残つてゐる。（第八巻、71～72頁）

(2) 午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎の花瓶に素枯れた花は、この間に女中が取り捨ててしまふ。二階三階の真鍮の手すりも、この間に下男が磨くらしい。さう云ふ沈黙が拡がった中に、唯往来のざわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓から、日の光と一しよにはひつて来る。(第八巻、74頁)

上記の(1)では、「商売に來たのも、見物に來たのも、泊り客は大抵外出してしまう。下宿している勤め人たちも勿論午後までは帰つて來ない」という文を通して、当時の上海の日本旅館に宿泊した客層が明記されている。当初、上海に訪れた日本人は単身の者が多かったが、その中でも女性は「からゆきさん」と呼ばれた娼婦が多く、男性は行商人が多かった。しかし、第一次世界大戦を境として上海に定住する人が激増し、日本旅館の客層も大きく変化した。日本国内から派遣された会社員や商店員がその中心となり、更に上海の魅力を経験しにきた旅行者も増加した。日本総領事館の1923年度の調査によると、日本旅館に投宿した総旅客数は8433名(男性7207名、女性1226名)であり、その内に投宿者数が最も多い旅館は豊陽館、万歳館、東和洋行、江星館、常盤舎であった¹⁶。

また、上記の(1)と(2)において「午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である」という文が繰り返されている。すでに神田秀美の論文で指摘されているように、このような反復表現によって、「時間が停滯しているような印象が与えられ」、時間の停滯感がさらに「空間の閉塞感を誘発」¹⁷する。だが、ここで注目に値するのは、女中と下男の「動」と旅館の内部で拡がった「静」との鮮明な対照である。

同時代の日本人経営の旅館について、高網博文は「上海の日本旅館に宿泊すると入れ代わり立ち代わり出入りする日本人「女中」の応接に暇のない思いをした。ボーイや下働きは中国人であり、彼らは日本語で「旦那さん、お風呂」などといった」¹⁸と日本人と中国人が共同で働いていた様子を解説している。また、上海の日本人旅館は、客の出迎えや荷物の運びを行ったのみならず、刺身、天ぷら、味噌汁など標準的な和食を提供し、客が夕食を終えて部屋に戻る前に既に布団を敷き、列車や汽船のチケットの代理購入、名所観光の案内など、日本国内の旅館と同じように、あらゆる方面から親切なサービスを提供した。それゆえ、上海の日本人旅館は「邦人の家」と呼ばれていた¹⁹。

前述の引用(2)の描写を通して、「部屋毎の花瓶に素枯れた花」を取り捨て、「二階三階の真鍮の手すり」を綺麗に磨くことによって、「上海特有の旅館」で働いた女中や下男が宿泊客に親切なサービスを提供している光景を窺うことができる。

また、引用の(1)と(2)で描かれているサービスのほかに、女性と女中との会話の中で、「上海特有の旅館」のもう一つのサービスが提示されている。

女中は思わず笑い出した。

「そんな邪慳な事を仰有ると、薦の家から電話がかかつて来ても、内証で旦那様へ取次ぎますよ。」(第八巻、73頁)

ここでは、女中の冗談の中にある「薦の家」と「電話」という二つの言葉に注目したい。まず、岩波書店版の『芥川龍之介全集第八巻』の「母」の注解では、旅館の女中が言及している「薦の家」に「芸者屋の家号」と説明がついている。上海で創業された初期の日本旅館は、日本商人や旅行者に宿泊の便を提供するとともに、主に外国人を相手に売春をしていた「からゆきさん」と呼ばれた日本人娼婦にも売春のための場所を提供した。1881～82年頃から日本人娼婦は著しく増え、『在上海帝国総領事館管内状況』(1921年)の「上海在留邦人職業別表」によると、妾や賤業婦を含めた芸妓、娼妓、酌婦などは558人あり、1617人の会社銀行員、945人の商店員其他事務員に次いで第三位であった²⁰。日本人娼婦が「商売」を営んだ娼楼は「東洋茶楼」や「日本旅館」と呼ばれた。

日本人娼婦の活動は一般の日本人居留民に強い不満を引き起こした。日本領事館は上海で売春する日本人娼婦を「国辱」とし、1883年に「清国上海居留民取締規則」を制定し、彼女たちを捕まえ追放しようとした。一方、上海の日本語新聞にも、上海に滞在した日本人女性の売春問題を痛烈に批判した記事が掲載されている。芥川が投宿する予定だった東和洋行は、1890年10月31日の『上海新報』に「日本旅館改良広告」という広告文を出した。その中で「御婦人にては、御夫婦連の外は、相当の御添書にても有之の外、あいまいなる婦人は一切御断申す事と致候」とし、売春を媒介する汚名を返上したいという旨を述べている。また、芥川が宿泊した万歳館は、開業当初「からゆきさん達の下宿屋」でもあった。経営者の相川夫妻が彼女たちの面倒をよく見たため、1921年に移転する際に「彼女達も貯金を抛出して協力して」²¹いたようであった。

大正時代の上海では、日本人経営の旅館と下宿屋が20軒あり、日本料理屋や遊郭が24軒存在していた²²。1924年版の島津四十起著『上海案内』に掲載された15箇所日本人芸妓屋の中で、「薦の家」と名を取った芸妓屋もなく、その存在すら把握し得ない。だが、ここで重要なのは、女中の冗談話を通して浮かび上がる上海の日本人社会の娯楽・消費文化の側面である。

一方、上海における電話の歴史を遡って見ると、1882年にデンマーク資本の大北

電報公司の電話交換所が完成し、共同租界とフランス租界で営業開始した。次いで上海電話互助会が参入し、通話料金の低価格競争が始まった。だが、異なる通信網によって不便があったため、翌年東洋徳律風公司是両社の設備を引き取り、その後の15年間租界での営業を独占した。しかし、東洋徳律風公司の経営は順調ではなく、租界当局は営業権を入札方式に変更し、30年の営業権を落札した華洋徳律風公司へと経営が変わった。同社は設備の充実を図り租界内外や遠距離通話ができるようになり加入者が増加した。

このような歴史背景の中で、「上海特有の旅館」において、女中や下男は宿泊客に周到的な宿泊サービスを提供する一方で、上海における日本人の芸妓・娼婦と宿泊客の間を仲介したことが推測できる。また、女性と女中の会話で、旅館、芸者屋、商社など上海に在留する日本人のコミュニティが描き出されている。特に「電話」のような近代的な機械によって、上海滞在の日本人同士が緊密に繋がっていたとも言えるだろう。それと対照的に、愛児を失った敏子は、単なる話題や同情の対象となり、上海における日本人共同体から疎外されていた。この小説においては、「上海特有の旅館」の静寂な雰囲気の中で、敏子の疎外感と孤独感が強調されているのである。

四 蕪湖の雍家花園

前述したように、「母」の第一章と第二章の舞台は「上海特有の旅館」の内部に限定されているが、第三章の舞台は敏子の夫が勤務する蕪湖となっている。本節では、この小説で描写された蕪湖について考察していきたい。

まず、同時代の蕪湖の歴史的・社会的状況について確認しておきたい。蕪湖は、安徽省南東部の都市であり、1876年の中英芝罘条約によって安徽省唯一の開港場となり、「長江の枢要に在り内地水運の便利特に宜しく」、「河船交通の咽喉にして将来益々繁栄に赴くべき風あり」、「市街清潔にして道路広闊」²³と評され、古くから長江中流の物産が集積する港町として栄えてきた。外務省通商局編『在支那本邦人進勢概覧』（1919年）の統計によると、当時の蕪湖には日清汽船会社出張所、三菱合資会社駐在所、三井物産会社出張所と戴生昌汽船局支店があった。

このような蕪湖の歴史的・社会的状況を把握したうえで、芥川の蕪湖旅行について確認しておきたい。芥川は、1921年5月17日の夜に上海から鳳陽丸に乗って長江を溯り、19日の夜に蕪湖に到着し、親友の西村（斎藤）貞吉の社宅である唐家花園に泊まった。20日に西村の案内で蕪湖の街を一通り回ったが、蕪湖に2日間滞在した。そして、芥川は1921年7月12日に旅行の最終訪問都市の天津から「安徽省蕪湖

唐家花園 斎藤貞吉様」という絵葉書を送り、感謝の意を表した。その中には以下のような「蕪湖」に関する箇所がある。

（前略）兎に角蕪湖でお前の世話になつた事は愉快に恩に着たき気がする
（中略）北京で蟬の声をききお前を思ひ出した蕪湖には今もブタが横行してゐるだらうな何だかゴタゴタ書いたもう一度お前の健康を祈る僕のやうに腹下しをするなよ さやうなら

天津 我鬼（第十九巻、186頁）

上述の絵葉書の内容で確認できるように、芥川にとって蕪湖は決して愉快的な旅行先ではない。親友の行き届いた接待を受けたが、彼の目に入ったのは、「ブタが横行してゐる」光景である。

また、長江流域の諸都市における旅行体験を記述した「長江游記」（『女性』1924年9月1日）には「一 蕪湖」の章があり、蕪湖での見聞や感想を記している。「日さへ当たらない敷石道」、「両側には銀楼だの酒棧だの、見慣れた看板がぶら下つゐる」、「往来の真ん中に、尿をする豚と向ひ合つた」といった不潔な光景に対して、彼は、「つまらない所だな、蕪湖と云ふのは。——いやー蕪湖ばかりぢやないね。おれはもう支那には飽き厭きしてしまつた」（第十一巻、253頁）と不満を漏らし、さらに唐家花園で「私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない」（第十一巻、254頁）と当時の中国を厳しく批判した。

芥川はこのような蕪湖に好感を抱かなかつたが、「母」の第一章で既に言及している。それは、敏子の夫が彼女に三階の部屋に戻る理由を尋ねた場面である。

男は少時たつた後、ごろりと仰向きに寝転ぶと、独り言のやうにかう云つた。
「蕪湖住みをするようになつたら、発句でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせず、縫物の手を動かしてゐる。

「蕪湖もそんなに悪い所ぢやないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相当に広いしするから、草花など作るには持つて来いだ。何でも元は雍家花園とか云つてね、——」

（中略）

男はちよいと臉を挙げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？ たとへば日本へ帰りたいとか、支那でも田舎へは行きたくないとか、——」（第八巻、69頁）

敏子は、隣室の子供の泣き声によって病死した愛児のことを思い出すが、その精神的苦痛を言葉にして夫に訴えることができない。敏子の夫は、彼女が三階の部屋に戻ることを強要する理由として、中国の田舎に行きたくないと誤解した。田舎の「蕪湖もそんなに悪い所ぢやないぜ」と敏子に説明するため、上海の旅館で窮屈な下宿暮らしをせざるを得ないのに対し、蕪湖の「社宅」に居住し、会社の福祉厚生を享受できると強調する。しかも、その蕪湖の「社宅」は、「雍家花園」という由緒あるところであり、そこの広い庭でガーデニングを楽しむことができる。

敏子の夫が期待を抱いた蕪湖の社宅の庭は、小説の第三章で次のように描かれている。

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戦ぎながら、庭や草や土の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。いや、草や土ばかりではない。その槐に張り渡した、この庭には似合はない、水色のハムモツクにもふり撒いてゐる。ハムモツクの中に仰向けになつた、夏のズボンに胴衣しかつけない、小肥りの男にもふり撒いてゐる。

(中略)

あたりは庭木の戦ぎの中に、かすかな草の香を蒸らせてゐる。一度ずつと遠い空に汽船の笛の響いたぎり、今はもう人音も何もしない。あの汽船はとうに去つたであらう。赤濁りに濁つた長江の水に、眩い水脈を引いたなり、西か東かへ去つたであらう。その水の見える波止場には、裸も同様な乞食が一人、西瓜の皮を噛ちつてゐる。其処にはまた仔豚の群も、長長と横たはつた親豚の腹に、乳房を争つてゐるかも知れない、——小鳥を見るのにも飽きた男は、そんな空想に浸つたなり、いつかうとうと眠りさうになつた。

(中略)

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戦ぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。文鳥はほとんど囀らない。何か唸る虫が一匹、男の肩へ舞ひ下りたが、直にそれも飛び去つてしまつた。(第八巻、78～79頁)

ここで、「汽船の笛」、「赤濁りに濁つた長江」、「乞食」、「豚の群」の描写に蕪湖における芥川の旅行体験が活かされているのは間違いないが、「午過ぎの微風に戦ぎながら」、「日の光と影とをふり撒いてゐる」といった反復表現を通して、第一章の冒頭にある陰鬱で静寂な上海の旅館と大いに異なる「平和な」庭の光景は描出されている。雍家花園の庭の中で、槐という植物は特に注目に値する。何故なら、第

三章において槐は三回ほど繰り返され、言及されているからである。

芥川は槐に対して特別な思いを持っている。彼は1926年11月『美術新論』に「槐」という随筆を発表した。随筆の中で、「四五年前に北京に遊びのべつに槐ばかり見ることになつたら、いつか詩趣と云ふべきものを感じないやうになつてしまつた。唯青い槐の実の莢だけは未だに風流だと思つてゐる」（第十三巻、254頁）と語られているように、芥川文学において、槐が「詩趣」や「風流」と結びついていると見なすことができるだろう。このように、「母」において「雍家花園の槐や柳」を繰り返して描出し、「午過ぎの微風」や「かすかな草の香り」と関連させて描写することによって、蕪湖の庭に溢れる「詩趣」や「風流」の雰囲気効果的に表わされている。

このような庭の描写は、登場人物の描写を生き生きとさせる働きを持っている。「平和な」雍家花園に移住してきた敏子の夫は、「空想に浸つたなり、いつかうとうと眠りさうになつた」が、敏子は「上海の旅館にいた時より、やや血色の好い」（第八巻、79頁）と「平和な二人」として描かれている。ここで注目には値するのは、「上海の旅館にいた時より」という対比的な描き方である。第一章の冒頭において、「もの憂そう」な顔、「何か苦勞を堪えている事は、多少想像が出来ないでもない」目、「病的な気がするくらい、米噛みにも静脈が浮き出している」（第八巻、68頁）といった細部までの描写を通して、上海で愛児を失った敏子のイメージが印象的であるが、それと対比的に、第三章で「やや血色のよい」という簡潔な描写によって、移住した後の「平和な」暮らしによる彼女の鮮明な変化が強調されている。

だが、敏子夫婦の「平和」な暮らしは、上海から届いてきた隣室の女性の手紙によって崩壊の兆しが表れる。上海で子供を亡くした母親が苦しんでいることを知った後、敏子は「お隣の赤さんのお追善」（第八巻、81頁）として、大事にしていた文鳥を鳥籠から放してやることを強く夫に提案した。

敏子の放鳥行為は、1921年初出の『中央公論』に掲載された当時全くなく、1923年『春服』所収の際に書き入れたものである。1921年9月20日に佐々木茂索に宛てた書簡で、芥川は以下のように「母」の改稿の理由に言及している。

「母」は思ふに（三）悪し 女主人公が人の子供の死んで喜ぶ所をもつとアクションの上より書けばよろしからむか さうすれば中々悪短篇にあらず 好短篇になる事受合ひなり（第十九巻、195頁）

この書簡で確認できるように、芥川は「アクション」として、上海の女性が子供を亡くしたことを知った敏子の放鳥行為を追加した。そして、大幅な加筆によって、

「母」という小説が「好短篇になる事」に対して自信を抱いている。このように、敏子の「アクション」が小説の展開に重要な役割を果たしていると言えるだろう。追善のために文鳥を取ろうとした際に、敏子には「眼にも唇にも」、「殆ど平静を失くした、烈しい幸福の微笑」（第八巻、82頁）が漲ってきた。敏子の夫は「この時妻の微笑に、何か酷薄なものさへも感じ、敏子の放鳥を止めたが、「気まづさを押しのける為か、急に又快活に」（第八巻、83頁）以下のように語っている。

「だがまあ、こうしていられるのは、とにかく仕合せには違いないね。上海にいた時には弱ったからな。病院にいれば気ばかりあせるし、いなければまた心配するし、——」（第八巻、83頁）

敏子の夫の話から窺えるように、蕪湖に移住してきた夫婦二人の生活は、国際色の豊かな上海に滞在した時より「とにかく仕合せには違いない」のである。しかも、蕪湖での「仕合せ」な暮らしは、上海で愛児を喪失した苦痛の記憶から解放されることによるものである。上海と蕪湖における生活の相違を強調することによって、近代的大都市で傷ついた精神を地方の田舎で慰藉することを求める敏子夫婦の姿が浮き彫りにされる。このように、敏子夫婦の「仕合せ」な生活の背後には、「大都市の上海／田舎の蕪湖」という対立が潜んでいるとも言える。

放鳥の要求が夫に拒否された後に、敏子は自らの複雑な感情を抑えきれなく、衝動的な言葉で以下のようにその心情を訴えている。

「私は、——私は悪いんでせうか？ あの赤さんのなくなったのが、——敏子は急に夫の顔へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「なくなつたのが嬉しいんです。御気の毒だとは思うんですけども、——それでも私は嬉しいんです。嬉しくっては悪いんでしょうか？ 悪いんでせうか？ あなた。」

敏子の声には今までにない、荒荒しい力がこもつてゐる。（第八巻、83頁）

上海旅館の隣人の子供の病死を伝える手紙を夫に読み上げる際に、敏子は「あら、お隣の赤さんも死んだんですつて」（第八巻、79頁）、「やつぱり風邪ですつて」、「ね、よく似てゐるでせう？」と「やや興奮したやうに」（第八巻、80頁）自身の境遇との類似点を確認し、再び過去の体験を思い浮かべた。小説の最後において、敏子の嬉しさは、「熱のある眼」や「今までにない、荒荒しい力がこもつてゐる」声を通して流出する。このように、蕪湖の庭で敏子の異常な行為は、母親の狂気とい

うより、むしろ自分の苦痛な心情や記憶をはじめて他人に理解され、上海に滞在した当初の疎外感や孤独感の束縛から解放できる喜びの表現と見なしてもよいだろう。

五 おわりに

芥川は中国旅行の経験、特に上海や蕪湖における体験を活かし、自らの作品で近代中国の都市の景観を描くだけでなく、その都市に集まる人間を観察して、如実に描こうとしたと考えられる。

小説「母」において、上海の「病院」の名前が明記されていないが、作品の中に散在した「病」や「死」を媒介とし、国際的大都市の上海は、「病の空間」として表象されている。そして、「上海特有の旅館」の名前も明示されなく、既に固定された静的空間として描出されている。このように、小説で描かれた「病院」や「上海特有の旅館」の名前を隠すことによって、それ自体が背負う歴史や社会的機能も隠蔽され、断片化されており、上海という近代的大都市の裏側に潜む都会人の深く抱いた不安感、疎外感、孤独感を表現しているともいえよう。

小説で登場人物が悲痛な体験をした上海と対照的に描かれたのは、田舎の蕪湖である。1920年代の蕪湖は、芥川が自ら「長江游記」や絵葉書で言及しているように、「つまらない所」であるが、小説の中で「平和な」庭の光景が強調され、安住できる場として描き出されている。「平和な」庭で移住した敏子は、愛児の死の苦痛から解放され、夫とともに「仕合せ」な生活を営むが、上海からの手紙で、再び愛児の死を思い出し、他人の子供の死に対して異常な喜びの感情を露にした。このような蕪湖の庭は、「大都市の上海／田舎の蕪湖」という対比を暗示し、小説で極めて重要な作用を発揮することができる場として捉えてよいだろう。

上述したように、従来女性の不可解な心理から読まれることが多かった「母」ではあるが、近代化の過程を歩む都市の上海や蕪湖が舞台として設定され、都市とそこに点在する近代的な装置が登場人物の活動に影響を与え、作品の展開に大きく機能していることは見逃せない。

注

- 1 本論文で引用した芥川の小説・書簡・紀行文は、『芥川龍之介全集』全24巻（岩波書店、1995～1998年）による。引用文の後には、巻数と頁数を記す。下線は引用者による。
- 2 葛西善蔵「九月の雑誌から（十六）」、『時事新報』、1921年9月27日。

- 3 伊藤貴麿「正宗、芥川、菊池、広津、五氏の作品」、『早稲田文学』、1921年12月。
- 4 三好行雄「宿命のかたち——芥川龍之介における〈母〉——」、『芥川龍之介論』、筑摩書房、1976年、251頁。
- 5 奥野政元「芥川龍之介における母なるもの（下）」、『活水日文』第30号、1995年3月、20頁。
- 6 萩原千恵「母」、関口安義編、『芥川龍之介新辞典』、翰林書房、2003年、495頁。
- 7 戸田民子「芥川龍之介「上海游記」：里見病院のことなど」、『論究日本文学』第46号、1983年5月、20頁。
- 8 鈴木晩世「芥川龍之介『母』の〈透ける耳〉描写における漱石の影響——中国特派員体験と聴覚」、『阪大比較文学』第3号、2005年8月、136頁。
- 9 中野江漢（1889～1950）は、本名が吉三郎であり、福岡県に生れ、15歳の時上京した。東京で印刷所の文選工をし、英語学校に通っていた。そのころにキリスト教会で洗礼を受けた。大陸進出を唱えた福岡の郷党から影響を受け、1906年に中国の漢口に渡り、翌年に玄洋社に入った。1915年に北京を活動の場とし、30年間在住した。1916年10月に北京聯合通信社を設立し、中国各地の邦字新聞や日本の新聞社に通信を送った。1919年4月に、前年創刊した『京津日日新聞』に入社し、北京支局主任を務めた。その後約2年間にわたって編集に携わった。1922年8月に「支那風物研究会」を設立し、中国の学術、思想、風俗、文物、そのほかの一般社会に関する事項の研究に専念し、『北京新聞』や『京津日日新聞』に随筆を発表した。1929年に生活の本拠を北京から東京に移した。1933年に「支那風物研究会」を「支那満蒙研究会」と改称し、『支那と満蒙』『江漢雑誌』を発刊した。終戦で引き揚げ後、「支那満蒙研究会」を「中国研究会」と改称し、中国研究を再開し、文壇やマスコミにも復帰し始めたが、1950年に肺結核で亡くなった。著書には『北京繁昌記』、『支那の売笑』、『支那の社会』などがあり、いずれも中国での刊行であった。
- 10 「自殺した芥川氏と北京 中野江漢氏談」、『北京週報』第226号、1927年7月31日、11～12頁。
- 11 平野健『上海渡航之槩』、上海、1921年、26～27頁
- 12 内山清・山田修作・林太郎著『大上海』、大上海社、1915年、114頁。
- 13 外務省通商局編『在上海帝国総領事館管内状況』、1921年、188頁。
- 14 平野健『上海渡航之槩』、上海、1921年、28頁。
- 15 前掲書、28頁。
- 16 菊池敏夫・日本上海史研究会編『上海職業さまざま』（勉誠出版、2002年、152～154頁）を参照。
- 17 神田秀美「芥川龍之介「母」試論：〈不可知〉を指向する作品トリック、テクニク」、『青山語文』第29号、1999年3月、159～160頁。

- 18 高綱博文「日本人旅館経営者」、菊池敏夫・日本上海史研究会編『上海職業さまざま』勉誠出版、2002年、153～154頁。
- 19 陳祖恩著、大里浩秋監訳『上海に生きた日本人——幕末から敗戦まで』（大修館書店、2010年、115頁）を参照。
- 20 外務省通商局編『在上海帝国総領事館管内状況』、1921年、142～144頁。
- 21 新井（相川）正雄「万歳館」、『会報匯山』第8号、1996年3月。
- 22 高綱博文「西洋人の上海、日本人の上海」、高橋孝助・古厩忠夫編『上海史——巨大都市の形成と人々の営み』、東方書店、1997年、122頁。
- 23 山口勲『清国遊歴案内』、石塚書店、1902年、85頁。